

教育コース

◆テーマ

多文化共生社会の実現のために青年ができる取組

◆コースの目的

グローバル化に伴い、多様な国籍やルーツを持つ人々の往来はますます活発になり、多文化共生に向けた取組は、あらゆる国で必要性を増している。教育分野においても、必ずしもその国の国籍やルーツを持たない児童の増加に伴う就学支援、学習補助、文化の尊重が新たな課題となっていることを踏まえ、参加青年はコースを通じて、多文化共生のためにリーダーシップが発揮できるようになることを目指す。

◆コースのねらい

グローバル化に伴う各国の教育現場の変化（就学児童の多国籍化やルーツの多様化、異なる宗教や文化背景を持つ集団に対する異文化理解教育のニーズの高まりなど）を、お互いの国の事例を通して理解する。各国において、異なる文化が交わる教育分野においてどのような課題や取組が行われているかを共有する。その上で、自身が所属するコミュニティの現状を踏まえ、各参加青年が実践的で意欲を持って取り組めるアクションプランを作成する。

◆事前課題

以下の2点について調べ、A4用紙1枚～2枚程度にまとめ、9月5日までにコースのメーリングリストへ送る。関連する写真、パンフレット、統計データもディスカッションに持参すること。

- (1) グローバル化に伴う教育現場の変化・新たな課題について、あなたの国・地域を念頭に、具体例を一つ挙げる。（※ここでいう「教育現場」は、学校に限らず、地域社会での活動なども対象とする。）
- (2) (1)を踏まえ、あなたの国・地域の教育現場で行われている「異文化理解の促進に役立つ」事例・施策を挙げ、その特徴を述べる。

◆9月28日課題別視察先

東京都立田柄高等学校

◆教育コースのスタッフ

アドバイザー： 滝澤 三郎（東洋英和女学院大学大学院 客員教授）

コーディネーター： 朱 明奈

実行委員： 西畑 瑠衣子

実行委員： 小河 宏輝

実行委員： 蛭川 樹



日時	プログラム	場所
9月27日 (火)		
10:45-11:45	国際青年交流会議オリエンテーション	成田エクセルホテル東急
12:30-13:45	昼食交流会	
14:00-14:45	[課題別ディスカッション1] ・グローバル化に伴う教育現場の変化・新たな課題について、 国ごとに共有し、類似点・相違点を議論する	
15:00-15:45	[課題別ディスカッション2] ・事前課題(1)に基づき、各国の教育現場で行われている 「異文化理解の促進に役立つ」事例・施策を共有する	
16:00-16:45	アドバイザーによる講義	
17:00-18:00	[課題別ディスカッション3] ・ワークショップ：多様性を体感	
19:00-20:30	夕食交流会	
9月28日 (水)		
7:30	課題別視察先へ向けて集合・出発	東京都立田柄高等学校
9:20-13:20	課題別視察：東京都立田柄高等学校 ・授業参加／見学 ・生徒とのディスカッション、交流、昼食	
15:00-15:30	[課題別ディスカッション4] ・課題別視察の振り返り	成田エクセルホテル東急
16:00-17:30	[課題別ディスカッション5] ・教育コースで学んだことのまとめ	
19:00-21:00	文化交流会	
9月29日 (木)		
9:00-10:00	[課題別ディスカッション6] ・参加青年が自国で取り組むアクションプラン	成田エクセルホテル東急
10:30-12:00	ホテルニューオータニへバス移動	ホテルニューオータニ
12:00-13:00	昼食	
13:00-15:00	課題別ディスカッションまとめ	
15:30-16:30	成果発表会	
17:00-18:00	評価会	
18:30-20:00	レセプション	
20:15	日本参加青年出発、国立オリンピック記念青少年総合センターへ バス移動	

“Being different is beautiful”という言葉をもさに体感できた三日間でした。「多文化共生社会の実現のために青年ができる取組」をテーマに、ディスカッション、ワークショップ、課題別視察を通じて、7か国から集まった青年同士が学び合うことができました。

教育分野における、多文化共生社会とは何だろうか。まずは、その問いに対して各国が発表をしました。不思議なことに、国は違えども、抱える課題はとても似ていました。それは、「グローバル化に伴う外国籍児童数増加に対する、学校の受入体制」でした。日本を一例にすると、フィリピン、中国、韓国籍等の外国籍児童が年々増えており、彼らが日本の学校でどのように生活しているのか、日本の学校はどのような対応を取っているのか、ということに焦点を当てました。

「僕は悲しい気持ちになった、どこにも所属するところがない、誰にも受け入れられないということは、とても悲しい」これは、多様性を感じるために行ったワークショップの後に参加者の一人が放った言葉です。そしてこの気持ちはまさしく、母国以外で生活を

する人の気持ちに近いものです。言葉が分からない、周りに受け入れてもらえない、理解してもらえない、居場所を見付けることができない。特に教育分野においては、外国籍児童は、他国での学校の授業にどのようなについていっているのか、という点を念頭に、参加青年たちは課題別視察先である田柄高校に向かいました。

田柄高校は500名中、100名を超える生徒が外国籍です。彼らが受ける日本語の授業を参加青年も一緒に受け、直接生徒たちと交流することができました。生徒たちと直に触れ合うことで、グローバル化に伴う中で、日本の学校がどのような対応を取っているか体感しながら学ぶことができました。

質問があふれ出す白熱したディスカッションこそが、教育チームの参加青年たちがお互いのことを理解しようとする姿勢の現われだと思えます。そしてその熱い思いが、今も各国に帰った参加青年の心の中に残り、様々な形で活躍することを願ってやみません。



日本参加青年 ドミニカ共和国派遣団 成澤 朗人

国際青年交流会議を通して、私は多文化共生社会を創ることは非常に難しいということに気付かされました。実際にそれを実感したのは、各国が抱える教育問題を共有し合う活動においてです。参加国の中には、1,000を超える部族が混在することにより伝統文化が薄れている国や総人口の半数以上が外国人であることによりアイデンティティの喪失が危惧されている国、国境を接する2国間の経済格差が広がることにより不法移民が絶えない国などがあり、これらの問題は私にとってどれも衝撃的でした。それと同時に、他国に比べ日本では移民の受け入れがあまり行われていないこと

に改めて気づき、他国が抱える教育課題の解決に協力できない悔しさを感じました。また宗教や文化の違いから、多文化共生を図る教育現場では、校則の設定や生徒指導の徹底が難しいということも印象的でした。これらの現状を踏まえると、多文化共生社会を創ることは難しく、良い面ばかりではないことが分かります。ですが、どの国においても、相手の背景を理解しようとする姿勢は今後一層大切にしていかなければいけないと思います。貴重な経験をした私が先頭に立って実践していこうと強く思いました。

日本参加青年 ラオス派遣団 木村 萌

国際青年交流会議は、世界に私たちと全く異なる常識を持つ人々がいるのだと改めて知る良い機会となりました。「多文化共生社会の実現のために青年ができる取組」という課題が与えられたとき、単に移民問題についてのディスカッションだと予想していたのですが、実際は各国の抱えるより複雑な問題を目の当たりにすることになりました。特に、外国人が人口の50パーセント以上を占めるバーレーンでは自国語が消えつつあることや、1,000以上の部族と850以上の言語を持つパプアニューギニアでは話合いをする文化が最近までなかったことは私の想像をはるかに上回りました。

ディスカッションは英語の得意なオーストリアやリトアニアの青年を中心に進み、どんどん会話にカットインしていく欧米式のやり方に戸惑いもあり、やはり自分は日本人なのだ改めて感じました。しかし、日本人には日本人の役割があると思い、大事だと思うことだけはしっかり伝えるよう心掛けました。結果として、様々な国の青年がそれぞれ適材適所で役割を果たし、楽しいディスカッションとプレゼンテーションを行えました。もっと長い期間話し合えたら、もっと密な議論ができ面白かったと思います。

国際青年育成交流事業の国際青年交流会議は9月27日に始まり、日本、ドミニカ共和国、ラオス、リトアニア、オーストリア、バーレーン、パプアニューギニアの参加青年によるディスカッション・プログラムが9月29日まで開催されました。

9月27日は教育、環境、文化の3コースに分かれました。教育コースのディスカッションは、グローバル化に伴う教育分野における課題の類似点と相違点を、各国で共有することから始めました。移民問題を始め、多くの国々で移民教育プログラムが不足していることについて主に話し合いました。この日の後半は、東洋英和女学院大学大学院の滝澤三郎教授の講義を聴きました。世界の移民の状況、移民の数と理由、受入国の教育制度に移民がどのように含まれているのかについて学びました。

9月28日の朝、私たちは課題別視察先の東京都立田柄高等学校の生徒、教員、校長先生にお会いしました。授業参加では、生徒が学ぶ様子を見学しました。その後、生徒と交流し、日本語のかなと漢字を練習しました。最後に校長先生とディスカッションをしました。田柄高校の今と昔についてお話いただきました。生徒の3割が外国人または外国にルーツを持つとのことでした。また、外国人生徒が教育制度の中で強みを持っており、学校内での多文化社会が、日本人の生徒にとっ

ても外国人の生徒にとっても、言葉とコミュニケーションの能力の向上につながっていることを知りました。その後、団メンバーは校長先生から様々な質問に答えていただきました。1日の最後に課題別視察について振り返りを行いました。

9月29日はディスカッション最終日でした。午前中の最終コース・ディスカッションでは、各国で取り組むための計画を共有しました。教育コースの最終ステップはアクションプランを考えることでした。私たちは日本を始め参加各国の教育の長所について考えたり、滝澤三郎教授の講義と田柄高等学校訪問についてまとめたりしました。現状により自国の教育制度では有用ではない要素を他国と共有することで、各国でそれらを比較検討した上でいかすことをねらいました。ディスカッションの場を別に移した後、私たちはバナーを作成し、他コースの参加者へのスピーチを準備し、他のディスカッショングループメンバーとスタッフを前にステージで成果発表を行いました。

最後に参加国で課題を共有しました。教育のグローバル化について話し合い、学校生活について様々な学びました。講義を通じて各国の違いが理解できました。様々なテーマについて各国が意見を述べる機会も多く、全ての参加者はそこから学びました。



教育コースを代表し、国際青年育成交流事業の国際青年交流会議の主催者に感謝いたします。7か国(日本、ドミニカ共和国、ラオス、リトアニア、オーストリア、バーレーン、パプアニューギニア)の青年が集い、友好と文化を深めるこの交流プログラムは、文化、環境、教育に関する重要テーマについてディスカッションし、重要課題に関する経験を共有する機会を私たちに与えてくれました。

教育コースの三日間では、参加国各団と膝を交えてのディスカッション、課題別視察、東洋英和女学院大学大学院の滝澤三郎教授のすばらしい基調講演、発表、評価会が行われました。

教育コースの主催者は、私たち参加青年を招へいし、各国の教育分野で起こっている変化に私たちの意識を向けさせてくれました。さらに、ディスカッションでは、多様な社会を取り巻く課題に対処しつつ、多文化社会を推進し、多様性が生み出す機会への認識を高めるプロジェクトへの参加(特に青少年による)の可能性について話し合いました。各国の発表は日本青年にも助けをもらい、各国の教育制度における課題と機会について学びました。ディスカッションで取り組んだ課題には、多言語・多民族社会、都市と農村の教育環境の違い、移民、統合、語学力、さらに公立と私立の学校の教育と経済力の格差などがありました。東京都立田柄高等学校を訪問する機会を得たので、最後のテーマは特に興味深いものとなりました。公立の学校は、移民のバックグラウンドを持つ留学生や生徒を積極的に受け入れることで多文化主義を進めています。生徒の多様性がもたらす課題を克服するために、学校はアクティブ・ラーニングや少人数制クラスの授業を戦略的に取り入れています。学校の課題の一つ

に、外国人生徒の日常生活の支援以外にも、日本の大学で学んだり、就職活動をしたり、日本企業へ就職するための支援があります。これらの状況に関する正しいルールを知ることが、すべての生徒にとって不可欠です。

生徒の試験勉強を支援するだけでなく、日本文化を教えることも教員と校長にとっての課題です。こうした中で学校方針は、規律と自由の理想の間で揺れ動いています。学校が次にとるべきステップは、日本人以外の生徒の統合とともに、彼らの潜在能力(語学)と能力を、例えば英語の授業等でいかせるような手段を見出すことです。

滝澤教授が基調講演で述べられたように、教育は世界で最も貴重な資源であり、世界の平和に貢献します。教育とは計算やエッセイの書き方を学んだり、完璧に言葉を話すためだけではなく、創造的な方法で課題を解決したり、あらゆるレベルで他人に心を開きコミュニケーションをとるためのものです。今年の国際青年交流会議で教育コースが果たした役割は、国を超えた教育制度の構築でした。私たちは世界の他の地域のことを知りました。多くの国が教育制度について同じ課題に直面していることが分かりました。これらの課題解決に向けての様々なアプローチを知りました。本コースで様々な人々と知り合ったことで、その国や国民について理解を深めたいという意欲を得ました。

ディスカッション・コース及び国際青年交流会議は、重要課題のディスカッションの場であると同時に、世界とのコミュニケーション手段を開拓するための優れた環境を創出してくれたと思います。積極的に参加された全ての参加団の皆様には感謝します。またお会いしましょう。

文化コース

◆テーマ

伝統文化を継承するために青年ができる取組

◆コースの目的

各国の伝統文化の事例から、現代における伝統文化の役割や価値について考え、参加青年が自身の課題として伝統文化継承を捉えることができるようになる。

◆コースのねらい

現代まで継承されている伝統文化と失われつつある伝統文化について、各国の事例を基に比較検討を行い、その相違点について理解を深める。その結果から、現代における伝統文化の果たす役割を見出し、伝統文化はなぜ継承されるべきか、継承されるべき要素とは何かを議論する。その上で、各国の様々な組織の伝統文化継承に対する取組を基に、参加青年が、自身の様々な所属先の一員として伝統文化継承のために何ができるか、何をしたいかを考え、最終的には、参加青年個人が実現できるアクションプランを作成する。

◆事前課題

以下の2点について調べる

A 現代に継承されているあなたの国の「伝統文化」を一つ選び、以下の4点を調べる。

1. 起源
 2. なぜ継承されてきたのか
 3. その文化の昔と変わらず残っている要素と変化した要素
 4. その文化が現代の自分たちの生活にどのような影響を与えたか（該当しうる事柄があれば）
- ※可能であれば選んだ伝統文化に実際に関わっている人に聴き取りを実施すること

B あなたの国において現代失われつつある伝統文化を一つ選び、以下の3点を含むレポートをA4用紙1枚で作成する。写真などがあれば添付をし、9月5日までにメーリングリストで提出する。

1. 起源
2. なぜ継承されなかったのか
3. その伝統文化は必要か不必要か。理由も併せて答えること

Aについては、個人が調べた資料を基に、ディスカッション開始までに各国の文化コースを選択したメンバーで調べた内容を共有し、共有した中から伝統文化を国で1～2個選び、それについてプレゼンテーションを一つ準備すること。プレゼンテーションは初日9月27日に発表する。プレゼンテーションは5分厳守。また、プレゼンテーションでは、必ず上記の1～3全ての項目に触れること（上記4については該当しうる事項があれば含めて下さい）。ただし日本参加青年は活動単位を派遣団ごととする。

（レポートの提出は不要）

◆9月28日課題別視察先

裏千家 東京道場

◆文化コースのスタッフ

アドバイザー： 阿部 一穂（裏千家）

コーディネーター： 小山 奈織子

実行委員： 片桐 悠

実行委員： 鈴木 芹奈

実行委員： ターマウォン・ダラワン

実行委員： 酒井 奈津子